路上生活者の個人史

第13回

竹中尚文

甲斐　浩之　氏(仮名)
1984年生まれ。40歳

私は神戸で生まれて、育ちました。両親は中国地方から神戸に出てきて、私は長男でした。私の下に弟が一人で4人家族でした。公立小学校、中学校、高校と進学しました。高校3年生の夏に親と対立して、祖母と叔母の暮らす家に移り住みました。親族間の家出でした。対立の原因ですか？それは進路の問題でした。両親は浪費家だったので進学ができませんでした。

家庭は子どもの頃から経済的に苦しいものでした。だから私はずっとお金を遣わないようにしていました。お年玉も貯めていたら、いつの間にか父親のお酒に変わっていたこともありました。

高校の成績もそれなりだったので、就職もすぐに決まりました。電気関係の会社に就職しました。おばあちゃんの家に住まわせてもらっていたので、給料から幾ばくかを渡していました。一方で、できるだけ貯金をしていました。一年ほどして、貯めたお金でアパートを借りました。この電気関係の会社は21歳まで勤めました。

お金がなくて、1日1食の生活でした。ドンドンと痩せてい

くので、この生活を続けたらダメだと思いました。体重が 2～30 kgほども痩せました。会社を辞めましたが、私たちは氷河期世代ですのでアルバイトを転々としました。24 歳の時に食べ物屋さんで働くようになりました。「まかない食」でしっかりご飯が食べられるようになりましたので、体重も元に戻りました。27 歳で自動車の中古屋さんに勤めました。30 歳まで中古屋で働きました。

30 歳の頃に自分の人生を考えました。ワーキングホリデーでカナダに行きました。北米を回れるバスの周遊チケットを買っていたので、バス旅行をしている途中に、事故に巻き込まれました。怪我をして、トロントで治療を受けました。治療を受けながらトロントの日系キリスト教会のお世話になりました。そこで滞在させてもらいながら、教会がホームレス支援とかをしているお手伝いをしていました。2 ヶ月ほど教会のお世話になりました。治療が終わり、帰国しました。

帰国してからキリスト教会に行って、ホームレス支援のお手伝いをさせてもらいました。いろんな教会に行きました。ボランティアをしながらアルバイト生活でした。そんな生活を 36 歳ぐらいまでしていました。アルバイト生活は経済的に苦しいですから、住宅リフォームの会社で働くようになりました。3 年足らずの間、その会社で働きました。

リフォーム会社を辞めて、職業訓練校に 1 年間、通いました。職業訓練校を終えたら、ちょうどコロナ禍が始まってしまいました。この数年は、いろんな短期のアルバイトで生活をしてきました。そうやって、今があるのです。

家族との関わりですか？ 弟

は結婚してから、音信不通になりました。父親が原因なのです。いわゆる外面はいいのですが、身内となると困った人なのです。身内には攻撃的なのです。でも、私にとっては父親なのです。酒は飲むし、ギャンブルはするし、いい親ではなかったですが、私を育ててくれました。19歳で社会に出て、生活をするのがとてもラクでした。親と一緒の家庭にいる時の方がずっと苦しかったのです。世の中に出て仕事をしている方がずっとラクでした。そういう意味では、私に耐性を付けてくれたのが家庭であったのかもしれません。弟は結婚で両親と離れてしまいましたが、私は両親と離れないです。両親が本当に生活に困っていたら援助もするだろうけれど、今はしないです。今、お金を渡したら酒かギャンブルに消えてしまうのが分かっているので。でも、自分は長男だし、両親を見守っていきたいと思います。

甲斐氏の話を聞いていて、二つのことを考えた。
彼はいろいろな立場に立てる人だと思った。一つの仕事を長く続けられないというのかもしれないが、経歴や学歴で人物評価するところになじめないのかもしれない。彼の力を発揮できる所に立てば、有能さを表現できるように感じた。今は支援を受ける側の列に並んでいるが、すぐに支援をする側にも回る人でもある。支援をする側、される側というのは固定した関係ではない。これからこのようなマルチサイドに立つ人たちが出てくると思う。そうした人たちが社会を活性化していくのかもしれない。
もう一つの思いは、自分の育った家庭に対して、彼の姿勢と弟の姿勢の違いが興味深い。どちらかの是非をいうのではなく、それぞれの考え方の違いがあっていいのではないかと考えた。同じ家庭で育っても異なる人間なのだから、その表現は異なるのは当然ではないかと思った。